

---

# 東方夢物語

かしわもち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方夢物語

### 【Zコード】

N4097BA

### 【作者名】

かしわもち

### 【あらすじ】

夏の幻想郷

いつもと変わらぬ平凡な生活を送っていた靈夢

しかし一つの石がその日常を変える…  
(かもしれない)

まあそんな所でしょうか

## 第一話 始まり（前書き）

ハハツ

どいつも、かしわもちです

今回初の投稿という訳です、はい

作者は痛い人なのであしからず…

この小説は一次創作です

若干のカオスも含まれております

「カオスだと！？パーさん蹴るなああー！」

…という方は戻るを押していくつてね

## 第一話 始まり

とある夏の日の幻想郷。

人里では人々が賑わい活気に溢れていた。

そんな中、東の端に建っている神社、博麗神社では一人の巫女が暇そうにお茶を啜っていた。

靈夢「いつもの事だけど…暇ね～。どうして私の神社には誰も参拝に来ないのよ。来るとすれば妖怪か亡靈ぐらいだし…。」

魔理沙「私は亡靈でも妖怪でもないぜ。」

横から聞き慣れた声がした。

靈夢はため息をついた。

靈夢「…何の用?お茶なら出してあげないわよ。」

魔理沙「冷たいなあ。折角おすそ分けにキノコ持ってきたのに…」

靈夢「そこに座つて待つてて頂戴。今お茶とお菓子持つてくるわ。」

やつぱり、やつれと行ってしまった。

魔理沙（相変わらず切り替えが早いぜ…）

魔理沙はふと思つた。

靈夢「お待たせ～」

魔理沙（早っ？）

靈夢「饅頭でよかつたかしぃっ。」

饅頭「ゆつー」

魔理沙「あ、ああ。悪いな。

（饅頭つて喋つたけか？…まあにこや。）

靈夢「で、何の用？いつもみたいに遊びに来たの？」

魔理沙「まあそれもあるぜ。ところで、この石を見てくれ。ここ

「…ひつゆみ？」

魔理沙はポツケから小さな石を取り出し靈夢に見せた。

靈夢「ちーく…黒いわね…。何なのコレ？」

魔理沙「さつき魔法の森からこへ来る途中で拾つたんだけど、何か不思議な感じがしてな。」

靈夢「うーん…確かに不思議ね…何なのかしら？」

魔理沙「何か分かるか？」

靈夢「はつきりとは言えないけど、妖力と靈力ともう一つ力が宿つてゐるわ。」

紫「神力ね。」

魔理沙・靈夢「…」

こいつの間にか後ろに開いていたスキマから、少女が現れた。

靈夢「また後ろから…。そんなことよつ神力が宿つてゐるひびきうつ事よ。」

紫「そのまんまよ。少なくとも幻想郷で生まれた石では無いわね。」

魔理沙「じゃあ、外の世界か?」

紫「わあへビヒカシラね?」

そつ言ひと、饅頭をつまんで食べた。この時の黒い石がうつすらと光った事をまだ誰も知らない。

紫は食べる物は食べたと言つて何処かへ行ってしまった。

靈夢と魔理沙は黒い石が何なのか調べに香霖堂へ向かつた。

靈夢「とこひで、具体的に何処で拾つたの? その[石]。」

魔理沙「お地蔵様の足元に落ちてたんだ。見た事が無い石だったから拾つて来たんだぜ。」

靈夢「それつて、拾つたと言ふ?」

魔理沙「拾つたんだぜ。」

靈夢「……。」

そのまま沈黙が続いた。

魔理沙は珍しい物を見つけるとやたらと持ち帰る。主に紅魔館の図書館の本や外の世界から流れ着いてきた物も持ち帰る。（泥棒）

（香霖堂）

カラソカラソ

香霖堂のドアを魔理沙が開いた。

霖之助「こりつしゃ……なんだ魔理沙か。」

魔理沙「靈夢もいるぜ。」

靈夢「こんにちは、霖之助さん。」

霖之助「一人そろつて今日は何の用だい？」

魔理沙「見て貰いたい物があるんだ。えーと……これだぜ。」

魔理沙はポツケから取り出した黒い石を見せた。

霖之助「どれどれ、……」れば……？

魔理沙「何か分かったのか？」

魔理沙が身を乗り出して尋ねた。

霖之助「いや、僕にも分からない。」

靈夢「どういって？霖之助さんの能力ならその石の名前が分かる筈でしょ？」

霖之助「名前が分からない…といつよつ名前が無いと言つた方がいいかな。」

魔理沙「どういってなんだ？」

霖之助「どんな物にも必ず名前がある。それがもしそこいら辺にある石や草であろうとね。けれども、この黒い石は只の石じゃない。何らかの力が宿つている。」

靈夢「妖力、靈力、それと神力つてやつの事？」

霖之助「ああ、その通りだ。」

魔理沙「でも、何でそんな物が出てくるんだ？」

霖之助「最近、幻想郷では変な事ばかりが起きる。靈夢も薄々感じてるんじゃないかな？」

靈夢「そういうば、以前紫が教えてくれたんだけど博麗大結界がいつも以上に不安定だつて聞いたわ。」

魔理沙「じゃあ、その博麗大結界の影響を受けてその石が出来たのか？」

霖之助「無いとも言い切れない。最近、人里の龍神像の眼が赤くなつてゐるらしい。君達に言うのもなんだけど……何が起こるか分からないから気を付けた方がいい。」

魔理沙「余計な心配だぜ、香霖」

靈夢「異変ならいつもの事だし」

霖之助「……そつだつたね、君達なら心配要らないだろ？」

魔理沙「へへへ」

魔理沙は余裕の笑みを浮かべた

靈夢「じゃあ、取り敢えず神力について聞きに行きましょつか」

魔理沙「誰にだ？」

靈夢「神奈子と諏訪子によ。神様だし、何か分かるでしょ？」

魔理沙「だな。じゃあ行くとしますかー！」

魔理沙と靈夢は石の手掛けを見つけに香霖堂を後にし妖怪の山の頂上にある守矢神社へ向かった。

その向かう途中の事だった。

靈夢「ひょ、ひょと魔理沙！待ちなさいよ。」

魔理沙「どうしたー靈夢ー。何か遅くないかー？」

靈夢「これでもスピード出した方よーでも……何かいつもより体  
が重いとか、何といつか……。」

魔理沙「それって、太った」

神靈『夢想封印 瞬』

魔理沙「ちよー待つ（ピチューんピチューん）」

ドゴオオオオ……

色々有りつつも妖怪の山にたどり着いた一人。  
そこへ、

?「あややや、やはしきの爆風はあなた達でしたか？」

靈夢「あら、文じゃない」

文「じつも靈夢さん、魔理沙さん、じ無沙汰します。……といふ  
で、今田はひんな」用事で？」

靈夢「神奈子と諏訪子に用事があるのよ。通してもいいんで？」

文「……大天狗様にこここの警備を任せました。どうしてもと言つのであれば、私を倒してからにして下さい。」

靈夢「結局、またこうなる訳ね……。」

靈夢が面倒臭そつに構える。

魔理沙「私も忘れて貢つちや困るぜ。」

魔理沙も構える。

文「この射命丸文、全力でお相手します?」

（無縁塚）

ヒュウウウウ…………ドサツ

?「ひでぶつ！？痛つてええ…何処だよ!!」…?

彼の目に映るのは見渡す限りのヒガングバナ

?「あれ？」いつもしかして……無縁塚…?じゃあここが…幻想郷か！」

俺のワクワクは止まらねえ！



## 第一話 始まり（後書き）

かしわ「はいどうせ、かしわもちでいるわね」

かしわ「今回初の投稿という事として皆様、どうでしたでしょうか？…ええ、自分でも…うん…何も言わんといて…氣を取り直して今回のゲストは博麗靈夢さんです！」

靈夢「宜しく」

かしわ「はい宜しくお願ひします。

さて靈夢さん、今回は如何でしたでしょうか？」

靈夢「如何でしたかって言わわれても…特に無いわよ」

かしわ「妙にグサつと来るんですけど…何か気になる事とかありません！？」

靈夢「ん…あ、そうそう、最後に出て来たの誰？」

かしわ「彼」…そが今回の鍵を握っている人物ですよーしかし彼が本格的に登場するのはまだ先だと思いますけどね

靈夢「お賽銭…入れてくれるかしら…」

かしわ「それは無いですね」

靈夢「…いつペニピチコるか？」

かしわ「……あこめせん

## 第一話 黒い石（前書き）

第一話ですかあ氣長にやらな  
いか

## 第一話 黒い石

文「よつと」

射命丸が飛び上がった。  
だが、様子が変だ。

射命丸がもし本気なのであれば、飛び上がるだけでも突風並みの風  
が起ころる筈なのだが今のはそよ風程度だ。  
手加減でもしているのかしら……

魔理沙「先手必勝だ！私も全力で行くぜ！」

魔理沙が八卦炉を構える。

靈夢「ちょ、ちょっと魔理沙！？」

魔理沙「恋符『マスタースパーク』？」

八卦炉から魔方陣が現れ輝き始めた……が、

シユボツ

シュー···

八卦炉は小さな火を出しただけで何も起きなかつた。

文「じうやり今日は私に利がある様ですね、グラグラグラ

射命丸はあざ笑つかの様に言つた、おおうぢこいづきい

魔理沙「な、何で出ないんだよー？」

靈夢「魔理沙、前を見て！」

振り向いた時にはもう遅かつた、射命丸はスペルカードをかざし発動させた。

文「もう遅い！ 風神『風神木の葉隠れ』？」

：が、

ヒューチ

ざまあ WWW

弾幕は現れずただ虚しくそよ風が吹くだけだった。

文「あややー…じつして私まで…?」

シ ア「坊やだからや」

そんなこと聞かれても私にも分からぬわよ  
そう思いつつも靈夢は、

靈夢「恐らく何をやつても無駄よ。私はスペルカードが発動出来る  
しね。やつきの爆風がその証拠よ」

文「仕方ありません……お通します。で す が！私もお供  
させて頂きます」

ここまで強調して言う理由は多分、話の内容を聞いて記事にしよう  
とでも考へて居るのだろう。  
まあ、そのぐらいならいいか。

靈夢「分かつたわ。好きにしなさい」

文「それでは、行きましょうか？」

何故か一番張り切つてているのは射命丸だつた。  
何をそんなに張り切つてているのか靈夢達には分からなかつた。魔理沙が小声で話かけてきた。

魔理沙「おい靈夢、良かつたのか？」

魔理沙が心配そうに尋ねる。

靈夢「心配要らないでしょ。話を聞いてるだけだし……それに文が  
いれば道中は心配要らなさそつだし」

魔理沙「まあ……石の事聞くだけだしな……」

靈夢達は妖怪の山の頂上にある守矢神社を目指した。

（守矢神社）

途中、白狼天狗にまた靈夢達が何かするのではないかと誤解された  
が、射命丸が説得し何とか守矢神社に到着した。

文「到着です……お疲れ様でした」

靈夢「あの白狼天狗どじにかならないの?」

文「すみません、あれだけはどうしても……」

申し訳なさそうに答える。

すると、神社の奥から緑色の髪の少女が現れた。

?「あら、文さんに靈夢さんと魔理沙さんではないですか」

彼女の名は東風谷早苗

この守矢神社の巫女であり現人神でもある。

(通称 ミラクルフルーツ)

早苗「それにしても珍しいですね。お一方がここへ来るなんて……」

靈夢「神奈子に用があるのよ」

早苗「八坂様に……ですか?……ああ、分かりました、こちらです」

神社の裏から上がり長い廊下を通りて大きな広間に出了。その広間の奥の真ん中に堂々と座っている人影があつた。

早苗「ハ坂様、客人がお見えになりました」

? 「ああ、『苦労だつたな、早苗』

そう返事を返すのはこの守矢神社の神様、山坂と池の権現であるハ坂神奈子だった。

(通称 ガンキヤ ハギヤ あああ！

靈夢「神奈子、聞きたい事があるんだけど……」

神奈子「黒い石についてだらつ」

神奈子は知っていたかの様に答える。それもそのはず、靈夢達が来る前に紫が来ていたからである。

靈夢「なら話は早いわ。この『石よ』

靈夢は手に持っていた黒い石を神奈子に見せた。後ろでは魔理沙が焦った表情でポツケの中を漁っていた。

魔理沙「靈夢……いつの間に取り出したんだ？」

靈夢「……あんた……霖之助さんに見せたつきりでこの石忘れて行つたでしょ……」

二人が香霖堂へ行つた時、魔理沙は石を受け取らずに飛んで行つてしまつたのである。靈夢は霖之助から石を受け取り急いで追いかけ行つた。そして、現在に至るという訳である。

それを思い出した魔理沙は、

魔理沙「あ……アハハハ……」

と笑つて誤魔化した。

靈夢「ハア……それより、どう、何か分かる?」

神奈子「あのスキマ妖怪が言つていた通りだ。三つの力が宿つているな……靈夢、この石を持つていて変わつた事はないか?」

靈夢「そういうば……飛ぶ時体が重かつたわ、あとは魔理沙が魔法を使えなかつたり……文が風を操れなかつたり……」

神奈子「成る程……どうやらこの石には能力を抑える能力を持つていらうらしいな」

それを聞いて靈夢は納得したみたいだが、魔理沙はまだ半信半疑だった。

魔理沙「じゃあどうして私や文はスペルカードが使えないかったんだ?  
? 石を持つてもいいのに……」

神奈子「多分、近くにいれば能力が抑えられるのだろう」

だから香霖でも分からなかつたのか……

魔理沙は納得した様に頷いた。

靈夢「……で、どうするの?」  
魔理沙「……持つてたらこっちが危ないじゃないじゃな  
いの……」

魔理沙「靈夢が持つてたつていいんじやないか? 能力が完全に消え  
る訳じやないし」

靈夢「え~? 面倒ね~」

渋々と石をしまった  
別にいいんじやんか、魔法使えなくなるとか私にどつては致命傷な  
んだぞ

「それじゃあ、何かあつたら宜しく頼むわよ」

神奈子「ああ、何か解り次第連絡する」

射命丸を使うんですね、わかります

「よこしょー…わわわー!？」

魔理沙「しつかり飛べよ靈夢」

「ついでにわねえ、ちゃんと行くわよ」

ふりつきながらも上手くバランスを保ち飛び去つてこつた

（無縁塚）

皆さん、どうも  
先程幻想入りした者です  
唐突ですが迷いました

? 「いや、迷いましたじゃないだろ俺…」

ビーさんのよこれ…場所の名前知つても意味無いでいる気分よ

? 「ハア…ビツキナカナ…」

俺はその場に倒れ込んだ  
東西南北もわからない、誰かがいる訳でもない、空に飛ぶ事が出来  
る訳でもない  
俺はその場で寝てしまった…

## 第一話 黒い石（後書き）

かしわ「はい第一話終了でした」

靈夢「いよいよあの人物が？」

かしわ「その通りでござる、次から視点が彼に変わるのでね」

靈夢「ちよつと向それ、聞いてないわよー!?」

かしわ「だつて今言いましたもん」

靈夢「…………（＝＼＼＼＼＼）」

かしわ「見るな！そんな目で俺を見るなあー  
ええい！続けるぞ！」

次の話から主人公の本格的な登場となります。

では！ ノシ

第三話 そつだ、博麗神社に行こう（前書き）

～青年ダンス～

～

や ら な

……ハツ（：：：）

か

本編始まる～

## 第三話 そつだ、博麗神社に行こう

紹介が三分ぐらい遅れたな

俺の名は水無月 蒼馬

バリバリ青春を楽しんでいる青年だ。さつきまでは無縁塚のど真ん中で寝ていた筈なんだが、何故か誰かの家にいた

ご丁寧に布団まで掛けもらつていた、ありがたや。辺りを見回すと、今では見る事が少ない囲炉裏、障子、草履などがあつた

蒼馬「誰が…運んできてくれたんだ…？」

無縁塚に来る人間は少ない筈、妖怪ならとっくに喰られてる、だとすると…？

考えていると廊下の方から足音が聞こてきた、障子が静かに開かれる

? 「お、目が覚めたか」

大学卒業に投げる様な感じの青い帽子を被った…

蒼馬「か…上白沢…慧音…！？」

慧音「！　何故私の名を…？」

やば、うつかり名前言ひちまつた

？「慧音～、あいつ田え覚ましたか～？」

あーこれはもしかして…

そう、藤原妹紅だった

本当に来たんだな…幻想郷に…

妹紅「ちゃんと田が覚めたみたいだな」

蒼馬「はい、お陰様で」

慧音「教えてくれ～何故私の名を知つているんだ～？」

慧音が激しく肩を揺らす

ぎやあああ～やめて～視界が揺れる～～

妹紅「け、慧音落ち着け！そいつ田を回してくる～」

慧音「あ…」

俺は更なる眠りについた、今なら飛べる気がする

（一時間後）

慧音「取り乱して済まなかつた…つい…」「

慧音が申し訳なさそうに謝る

蒼馬「いえ、いいんですよ…ハハハ…」

結構キテたけどな…

慧音「すまん…改めて白沢紹介をやめちゃうわ、私の名前は上白沢慧音だ、隣にいるのが藤原妹紅だ」

妹紅「よろしく」

蒼馬「水無月 蒼馬です、以後、よろしくお願ひします」

慧音「よろしく、さて、先程の事だが…何故私の姫を…」

やべえ、なんて呪つかな…じぶつかぬ…じぶつかぬよ俺…

蒼馬「えー…それはですね…………夢です」

慧音「ゆ、夢?..」

やつひやつたよ俺…キイ〜ヤ〜

蒼馬「そうです、夢なんですよ」

慧音「そつか…」

すみません慧音さん…いざれ話しまか…

妹紅「お前は外来人なんだよな?..」

蒼馬「はい、仰る通りです」

妹紅「お前は運がいいな、無縁塚で寝てて生きてる奴なんて始めて  
みたの？」

蒼馬「え？マジで？（迫真）」

妹紅「マジで

…つと…知つてたよ妹紅…

ガララッ

? 「慧音ーーいるんでしょーー？」

慧音「…あれは靈夢か…すまないな、少し席を外す」

と言つと慧音は玄関の方へ行つた  
靈夢がここに来るつて珍しい事じやないか…？……お、こひちに來  
るな

慧音「それで？何の用だ？」

靈夢「この石について何か……あ、誰かしりへ」

出た！初代脇巫女、博麗靈夢！

蒼馬「あ、どうも、水無月 蒼馬といいます」

靈夢「ふーん……博麗靈夢よ」

予想通りの返事、ありがとうございました

「この石よ」

あれ？あの石は確か…

慧音「黒い石だな……これがどうした？」

妹紅「慧音、何かその石…変な感じがする…」

失敬な！

靈夢「何か知つてゐ？」

蒼馬「あのーすいません」

靈夢「何よ

冷てえなオイ！分かつてたけど妙にグサッといへるだいれー！

蒼馬「その黒い石は俺のです」

靈夢「……」

慧音「……」

妹紅「……」

静まり返る居間、静寂、そして俺に向けられた驚愕の眼差し……え？  
俺何か悪い事言つたつけ？言つてないよね？何で皆あんなに驚いて  
るの？なにこれこわい

靈夢・慧音・妹紅「ええええええーーー？」

蒼馬「ひょ？」

凄い驚かれた… そんなに意外かー？ やつぱり傷つく…

靈夢「これあんたのだつたのーーー？」

蒼馬「ええ…まあ…」

靈夢「ならあんたが持つてなさい」

靈夢から黒い石を渡された

よつやく帰つて来たか、A I B O！

前に見たより黒くなりやがつてーーーん？ こんなに黒かつたけか？

靈夢「じゃあ私の用事は済んだけど、蒼馬は元の世界に帰るの？」

蒼馬「いえ、帰つません（キリッ）」

家に帰つたつて… もうせ…

靈夢「じやあどひすのよへ。」

蒼馬「博麗神社に行こうと思いまーす。」

靈夢「何で私の神社に…？そんな事できる訳…」

蒼馬「賽銭入りますから」

靈夢「歓迎するわ（ニコニ）」

いい笑顔だ、計画通り…

靈夢「それじゃあ失礼するわ」

蒼馬「すみません、お世話になりました」

慧音「うむ、何かあればいつでも来い」

妹紅「じやあな」

次は博麗神社か…全部回れたら回りたいな

靈夢「…で、蒼馬はどうやって移動するの？」

蒼馬「徒歩です」

そりゃあもちろん徒歩ですよ靈夢さん、俺飛べませんもん仕方ないね

靈夢「ハア…しあうがないわね…ちやんとつかまつてなさいよ」

蒼馬「え？それはどういってのわああああああ！」？

キラン

俺、生きてたら、靈夢にお茶をじっくりして貰つんだ…



## 第三話 そつだ、博麗神社に行こう（後書き）

かしわ「第三話オワタ、いやー疲れたなー（嘘）」

魔理沙「おーい、嘘つて書いてあるぞ」

魔理沙「仕様さ（キリツ）」

魔理沙「それは別にいいが、どうして私がいないんだ？」

かしわ「魔理沙さんはアリスさんの家に向かったといつ設定ですわ、  
はい」

魔理沙「アリスの家に？まあ用はあるけどな」

かしわ「泥棒ですね、わかります」

魔理沙「人聞き悪いな…借りてるだけだぜ」

かしわ「死ぬまででしょ？人はそれを泥棒と呼ぶんですよ」

魔理沙「う…（――・）」

かしわ「はい、それではまた次の後書きでお会いしましょう、ロケ  
ツトピース！」

## 第四話 秘められた力（前書き）

初めて戦闘が入ります

短いんですけどね！

# 第四話 秘められた力

上空

速い速い速いって！アカン！これアカンて！いや、これは逆に考えるべきか？…よし…！

アケセルシンクロオオオオ！！

# 靈夢一はい到了着

靈夢が手を離す

ベシャツ  
ズザザザザザ  
ドゴホツ

仰向けに滑り転かりそのまま木に激突した。普通死ぬよ」れ

蒼馬 グフツ 痛つたくない?

「うん、違う事ぐらいわかってますとも

靈夢「あら? 蒼馬、貴方無傷じやない」

蒼馬「傷つける気満々だつたんですか！？」

靈夢「いや……」めんなさい、あんなスピードは初めて出たから制御効かなくて……」「へ、身体が急に軽くなつたみたいな……」

わざとらな感じがしたが……嘘をついてる感じでもなさそうだな……

蒼馬「あー大丈夫ですよ、無傷でしたし」

あんなスピードで無傷な俺が信じられない  
さて、賽銭箱はどうかなーと…  
あつたこれだよコレコレ

田の前にある神社、一見何の変哲もない普通の神社だった  
その神社の正面に置いてある直方体の箱…そつ、『サーセン箱』である

見た目だけでも何も入ってなさそうだなオイ  
確かポツケに…あつた

ウホッ…いい五百円玉…

それ (チャリーン)

靈夢「お茶を淹れたから上がつて頂戴?」

速つ！もう淹れたの！？

驚きつつも神社に上がつた

そして広さ畳五常の部屋でお茶を啜つていた

ズズー…ふう…UMAすぎるー。

蒼馬「良いお茶ですね」

靈夢「当たり前よ、私が淹れたんだもの」

蒼馬「左様で、」  
（ ）

苦笑い、まあ美味しいのには変わりないが

靈夢「ところで蒼馬」

蒼馬「何でしようか？」

靈夢「幻想郷に留まっちゃっていいの？」

蒼馬「？ どうしてですか？」

靈夢「貴方の家族が心配してない？」

蒼馬「家族ですか？」

.....

靈夢「……おーい、そーうーまー？」

蒼馬「……え？ あ、はい大丈夫ですよ、何とかなりますって」

靈夢「今ボーッとしてたけど… 大丈夫？」

蒼馬「んー… ちょっと境内を散歩してきますね」

俺はそつと境内の散歩に出た

ザツ ザツ ザツ ザツ

蒼馬「家族…ねえ…」

家族…それは今の俺にとって無縁な言葉だ、俺も人の子だ、両親もいる  
いや、正確にはいた…かな

…………そろそろ戻るか

そう思つていた矢先だった

グルルルル…

狼の様な妖怪が俺の周りを囮んで回つていた

オイオイ冗談だろ…ここで妖怪かよ！

ヤバイヤバイと考えていると空から声が聞こえてきた

靈夢「蒼馬！早く逃げなさい！」

靈夢は俺の方に向かつて来るが遅い  
妖怪が一斉に飛び掛かってきた

ここで俺は死ぬのか…?  
信じねえぞ…お断りだ！

蒼馬「おおおおおおおおお…！」

俺はがむしやらに右拳を前に突き出す、何もしないよりはマシだ

そう思つた瞬間だつた

突然握つていた黒い石が割れ衝撃波を放つた

その直後に俺を中心に竜巻が起きた

蒼馬「な、なんじゃこりやああ！？」

もう訳わからん、くそつたれ！

「オオオ…

竜巻が收まり辺りの視界が開けた

吹つ飛ばされた妖怪がまだこちらを見ていた、しつこいな…

靈夢「貴方…その格好…！」

空にいた靈夢が驚いた目で俺を見ていた、え？俺そんなに変く…

蒼馬「な…何だコレ！？」

先程着ていた服と明らかに違つていた

黒い袴、白い小袖、蒼い羽織、刀…どゆこと…？

グルル…ガアツ！

妖怪がまた一斉に飛び掛かってくる、ふと頭に浮かぶ文字、

これつて…面白え、やつてやらあ！

蒼馬「剣戟『円月斬　　望月』…！」

抜刀しその勢いのまま円を描く様に回転斬りを放つた、が妖怪には当たらなかつた

しかし後から青い衝撃波が流れ、妖怪に直撃し吹き飛ばす

蒼馬「ハア…ハア…やつたか?」

あ、ヤバ、これフラグだ

ボオンツ ボオンツ ボオンツ

妖怪が突然弾け飛んだ、しかし黒い紙の様なものがひらひらと宙を舞つただけで消えていった

妖怪じゃあ…なかつたのか…?

靈夢「蒼馬！大丈夫？」

蒼馬「大丈夫だ、問題無い」

靈夢の気遣いを台無しにする様な言葉、サーベン

靈夢「それにしても…何なのよその格好といい、今の技といい…」

蒼馬「ああ…？俺にもさつぱり…」

靈夢「まあ無事で何よりだわ、詳しい事は神社で聞くから」

そう言つうと靈夢は神社の方角へ飛んでいった  
さつきから思つてたがこの格好…

いいセンスだ

さて、俺も神社に向かうとするかな

## 第四話 秘められた力（後書き）

かしわ「第四話終了おつおつ！」

魔理沙「お疲れ様なんだぜ、にしても何だつたんだあの妖怪モドキ？」

かしわ「現段階ではまだ解明されていない状況です、それも後々…（結構先）」

魔理沙「この先はどんな奴らが出るんだ？」

かしわ「んー旧作の方はわかりませんが…一応全員出す予定ではいます…多分…」

魔理沙「確証無いのかよ…」

かしわ「仕方ないね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4097ba/>

東方夢物語

2012年1月14日17時51分発行